

タイの経済発展と農村間分業の形成： ヤソトン県の三角枕の事例

池 本 幸 生

はじめに

タイは1980年代後半以降目覚ましい経済発展を遂げてきたが、同時に所得格差も急速に拡大してきた(Ikemoto[1993]参照)。タイの場合、経済発展を主導してきた第2次および第3次産業はバンコクおよびその周辺に集中しているために、所得格差の拡大は農村・都市間の格差の拡大として捉えられ、人によっては1980年代後半以降の経済発展が農村部になんらの便益ももたらさなかったとまで考えている。しかし、バンコクを中心とする経済発展は実際には様々なチャンネルを通して農村部にも利益をもたらしてきた。そのようなチャンネルとして地方からバンコクへの出稼ぎ、消費財の農村部での販売、政府支出の地方政府への移転および工場の地方分散などいろいろな側面から捉えることができる。

本稿ではこのようなチャンネルの一つの例として、農村家内工業を取り上げる。このような農村家内工業は最近では政府の奨励措置を受け、また NGO のサポートもあり、各地で様々な試みが見られる。この小論では、タイの地方の中でも所得水準の低いとされる東北部からヤソトン県シータン村における三角枕作りを例にとり、1980年代後半以降の高度成長の時期にそれがどのように変化してきたかを明らかにしながら、高成長の地方へのインパクトとその経路について考えてみることにする。

1. 三角枕の用途と歴史

三角枕の形は正三角柱をしており、三角形の一边は約30cm、幅が約50cmのものが一般的であり、これは背もたれ・肘かけとして用いられる。大きさは大から小まで様々あり、寺に寄進するためにその数倍もの特別大きなものを作ったり、逆に飾り用として小さなものを作ったり、キーホルダー用として更に小さなものを作ったりしている。また、さらに実用的にするために座布団を1〜3個付けたものなど多くの種類が作られている。少量多品種生産と言えよう。用途としては、かつては寺に寄進したりあるいは客に贈ることが中心であり、自分で使うことはあまりなかった。従って、市場もほとんど存在せず、各村で自給自足の状態にあるか、せいぜい近隣の村の間で交換されていたにすぎない。従って、どの村でも昔は三角枕を作れる女性がいいたと言われ、いい三角枕を作れることがいい嫁の条件でもあった。しかし、最近では観光客向けに作られたり、自分で作らず買ってくるようになったこともあり、市場が

徐々に拡大してきている。

シータン村での今日の三角枕作りの歴史は20年程度まで遡ることができる。今から約30年前(1960年代初め)、ある村人がバンコクに出かけて行ったとき、ある寺で綺麗な三角枕を見つけ、その美しさに感動し、村に帰ってから自分の村でも作らせるようになったというのが直接的な契機である。このことはシータン村では、ほとんど知られていなかったということを示している。しかし、1970年代に政府が農村開発政策を採るようになると、ヤソトン県ではシータン村の三角枕を奨励するようになった。この段階ではシータン村には三角枕を取り扱う商人は3軒あり、村の約半数の家で三角枕を作っていた。販売は商人だけでなく、村人たちの作った生産組合も行っていた。この段階では奨励策と言っても全国物産展のような場で三角枕を展示する程度のことしか行われておらず、資金的な援助などはなかったようであるが、物産展のおかげで徐々にシータン村の名が全国的に知られていくようになった。1984年頃になるとほぼ全戸で三角枕を作るようになり、1980年代後半以降の高成長期に三角枕に対する需要も急増するとシータン村のみでの生産では需要に追いつけなくなり、1989年頃から周辺の村に織布の委託が始まり、さらに1991年にはシータン村で布を織ることを止め、ここに農村間で三角枕の分業体制が成立する。



パーキットを使ったかばん作り

2. 三角枕の生産工程

三角枕生産の分業関係を示すために三角枕のの製造工程を以下の3段階に分けて説明しておく。

①機織り

用いられる布で主要なものは「パーキット」と呼ばれる模様を織り込んだ布で、ラオスや東北タイ等

で伝統的に古くから織られてきた。綺麗な模様を出すために簡単な仕掛がしてあり、それを使いこなすためには熟練を必要とする。従って、誰でもがパーキットを織れるというわけではなく、特に年輩の一部の女性が織ることができるというケースが多い。ただし、パーキットを織るのが盛んな村では若い女性でも織ることができる。一般的に布を織るのは女性の仕事である。機織りに用いられる機は木の枠に關してはどこでも手に入れられるような材木であり、コストは高くない。糸を通す部分(箴:おさ)については町で買ってくるが75パーツという安いものである。機織りでもっともコストのかかるのは糸である。機織りが下請けに出される場合には糸は商人が持ってきて貸し与えるという形をとる。この工程は技術的には広い範囲で残っていること、機自体に投資をそれほど必要としないこと、織るのに時間がかかることのために三角枕作りのボトルネックとなることなどの理由により、シータン村は周辺の村に依存するようになった。

②縫製

三角枕の縫製は、きれいに正三角形になるように一辺約8cmの正三角形を組み合わせるような形に縫い合わされている。普通の大きさのものなら10個、小さめのものなら6個、大きめのものなら15個組み合わせられる。この繰り返しによりさらに大きなものも作ることができる。内部に用いる布はパーキットではなく、網のような目の荒いものである。これらの布を縫い合わせていくという工程は複雑であり、熟練を要する。また、この段階ではミシンを必要とし、投資が必要となる。電動のミシンは足踏み式のものより値段が高いかわり生産性も高い。この工程は電動化と熟練によって生産性を伸ばすことができ、需要の拡大に対してもシータン村内の労働で十分対応ができる。そこでこの工程はシータン村で独占されることになる。

③綿詰め、仕上げ

この工程は②の工程で縫い上がったものに藁を芯として詰め、その周りにカボックの綿を棒で詰め込む。その後側面に当たる正三角形部を約8cmの小三角形ごとに縫って蓋をしていく。この工程の道具は、綿詰め用の棒と仕上げ用の針だけが必要である。作業自体簡単なので子供が手伝ったりしている。

シータン村ではコスト削減のため藁を芯にし、その周りにカボックを詰めているが、高級品としてカボックだけを詰めたものは高く売られる。

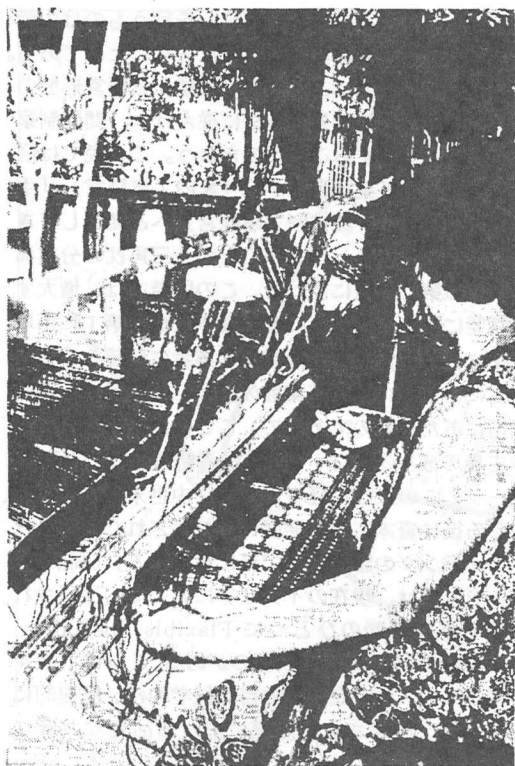


三角枕の仕上げ

3. 三角枕の村落間分業

三角枕生産における分業関係は村内部の小規模なものから村の間での分業という大規模なものまでである。ここでは村間分業の行われる大規模なものについて見ていくことにする。この分業関係の中心にあるのはシータン村であり、三角枕の生産工程②③はシータン村によってほぼ独占されている。シータン村に隣接するニコム村でも工程②③は行われているが、シータン村とは条件が異なるので後に再び取り上げる。シータン村が工程②③に特化することになった経緯はすでに述べ通り、シータン村のみで三角枕を生産してきたが、1980年代後半からの高度成長に伴って三角枕に対する需要も急増し、その需要に対応するためにシータン村の商人達はパーキットの供給を村外に求めたということである。

では、なぜシータン村の商人達は村内では工程②③に特化し、工程①を村外に求めたのだろうか。まず、技術的制約として考えられることは工程②に関しては修得に時間がかかるということである。つまり、需要の急激な増加に対して工程②の技術を他の



パーキットを織る

村に移転しては間に合わない。また、ミシンに対する投資も必要である。このような条件があるので三角枕生産を他の村に委託することはできない。次に工程③であるが、この技術は他の村に移転することは容易ではあるが、シータン村の内部で余剰労働力が存在する限り、他の村に委託する必要はない。実際、この工程は子供が学校から帰ってきてからや、学校が休みの時などに親の手伝いとして行われているし、ミシンを使えない人や縫製の仕事のない人が行うなどして十分村の中で賄うことのできる作業である。ただし、この数年の間に中学進学率が100%に近いところまで上昇してくるようになると、小学校を卒業した後、町に出稼ぎに行く15くらいになるまで工程③の作業を手伝うというケースは減少している。

村間分業の成立するもうひとつの条件としてシータン村の人々の利益を図るという商人の行動原理をあげることができる。三角枕生産を組織しているのはシータン村に住む商人たちであるが、彼らが村の中で商人として活動していくためには、村人たちとの協力的関係を必要とし、村人の協力を得るために

は他の村の人たちと比べて少なくとも不利にならないという条件で村人達に仕事を与えることが期待されている。工程②については最も収入のいい工程であるためにシータン村の人たちは手放そうとはしない。工程①と③を比べてみると両者とも一日の稼ぎとして平均的には80~100パーツ程度になるが、熟練・技能ということを考えた場合、工程①の方がより高い収入になっても不思議ではないが、両工程が同じ収入になるということは工程③の方が優遇されている。つまり、シータン村の人たちに有利な条件が与えられていると考えられる。この点は実際に三角枕を作っている村人へのインタビューでも明らかである。すなわち、「なぜシータン村では機織りを止めてしまったのか」という問いに対し、「儲けがよくないから」「時間がないから」という答えが聞かれた。このことは村人自身、たくさん作らなければならないなくなったとき最も効率の悪い部分(労働に対して儲けの悪い部分)をまず最初に止めていったことを示している。そして、それに応じる形で商人たちはパーキットを織れる人たちを探していったということである。

シータン村の人たちが工程②③を有利な仕事であると思なしているという点は、例外的にシータン村が工程②③の下請けをさせているニコム村を検討することによって確かめることができる。ニコム村はシータン村から幹線道路に出た所にある。この村にはシータン村の人々と親戚関係にある者が多く住み、シータン村の人からは兄弟(親子)関係にある村と見なされている。従って、シータン村の商人がニコム村の村人の利益も優遇すると解釈することにより、この例外も理解することができる。

このような自分の村の利益を優先するという行動は村落間の経済格差を維持・拡大する方向に作用していると考えられる。ただし、他の村では宝石研磨などの別の家内工業を行ったり、バンコクに出稼ぎに行くなどの収入源を持っているケースも多くみられ、シータン村以外の村は貧しいというように単純に割り切ることはできない。

次に工程①の機織りを行う村について見ると、ヤソトン県中部の広い範囲に分布している。このような地域が形成されたのはシータン村の商人がパーキットの不足を補うために周辺の各村を回ってパーキットを織れる人を探し歩いた結果である。商人は町で買ってきた綿糸を織り手のところに届け、織り手はパーキット単位当たりいくらという条件で織る。

そして商人は織りあがった布を回収すると同時に織り賃を支払う。このような織り手のいる村の例としてポーサイ村、ポーシー村、クラン村、タオハイ村、ノーンクー村、シン村、ノンヒン村、ノンベット村などがある(これらの地域の広がりについては河野・永田(1992)図8参照)。

4. 商人の役割

商人達は三角枕の分業を組織するという重要な機能を果たしている。ここで言う商人というのは、シータン村で三角枕を取り扱っている人々を指し、多くは女性である。その理由は、もともと布を織り三角枕を作るという作業は女性の仕事であると見なされてきたために、三角枕に関連して働くのはほとんどが女性であったからである。最初は組合(グループ)を作って組合が三角枕作りを組織し、組合単位で町に売りに行くという形をとることが多かった。ところが、彼女らの中から資本を蓄えたものが商人となり、自ら生産を管理し、バンコク等の町の商人たちと取引を開始するようになった。従って、三角枕を作る者からそれを売る者まで女性であるということになった。今でも三角枕作りをするのは女性の仕事であると考えられ、男は農業を行うという意識が強い。ただし、バンコクなどの工場働いてきた男の中には町の工場働くのと同様の感覚で三角枕の縫製段階を手伝う者もいるが、それは少数である。

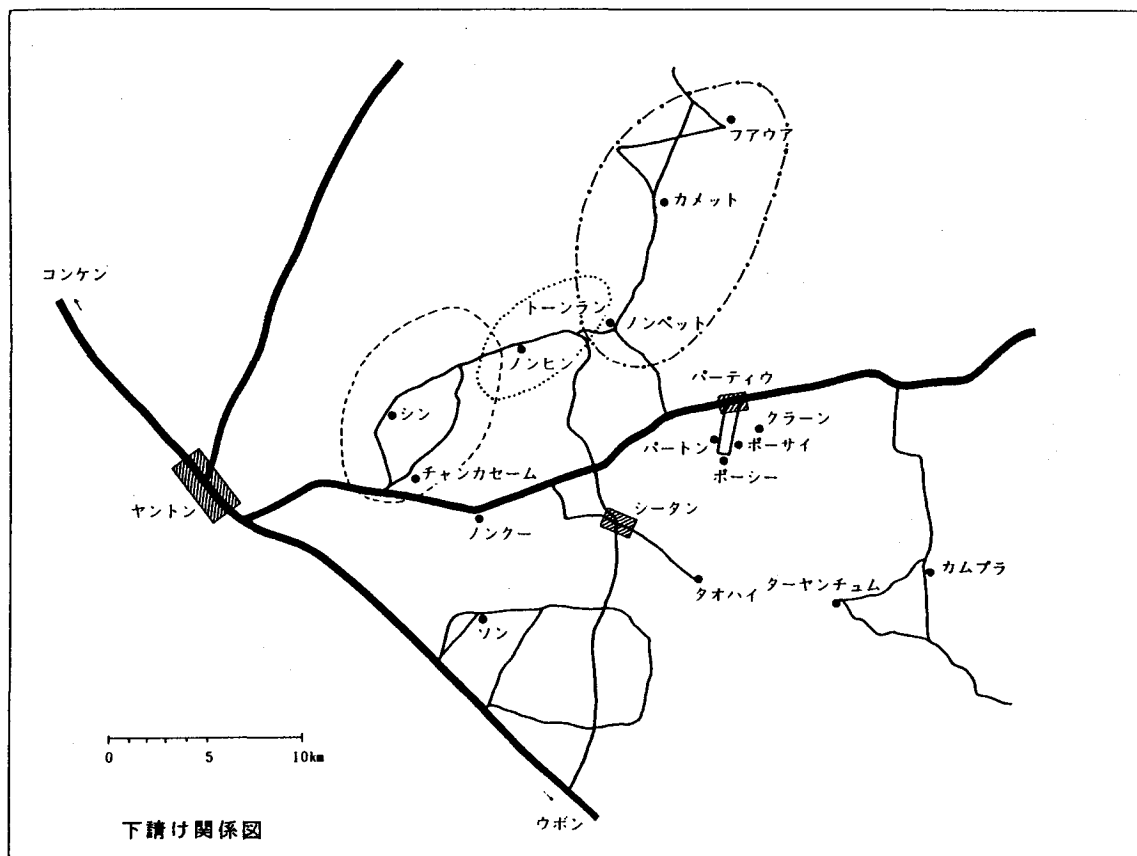
商人達は単に卸売りに従事するだけでなく、資本家的役割も果たしている。すなわち、彼女らは周辺の村の村人に対しては町で買ってきた綿糸を前貸ししてパーキットを織らせ、そのパーキットをシータン村の人々のところに運んで縫わせ、さらにカボックのわたも調達してきて仕上げさせる。

材料の前貸しを行う商人は資本を蓄積していくとともに前貸しを行わない純粋な商人に転化していく。この転化のプロセスは次のようにして生じる。前貸しを行う商人達は三角枕の販路を次第に全国に広げていくが、取扱量が増えてくると生産の管理まで自分で行うのは困難になってくる。同時に生産を請け負っていた人々の中に資本を蓄積し、前貸し商人的活動を行いうる人たちが出現してくる。すると、もともと前貸しを行っていた商人達は生産活動から手を引き、生産はすべて新興の商人に任せてしまい、自らは流通に特化することになる。新興の前貸しを行う商人達もまた将来生産活動から手を引き流通に特化することを望んでいる。その理由は利益がより

大きいということの他に、前貸しを行うものは生産管理上のリスクも負わなければならないためである。

このような商人による生産の組織化は経営形態の歴史的発展段階論の分類方法に従えば、「問屋制家内工業」と分類することができよう。この説では経営形態は「手工業経営」から「家内工業経営」「手工的工場経営」「機械制工場経営」へと発展してきたとされ、シータン村を中心とする三角枕の分業体制はこの第二段階に当たる。この段階では、増大する需要に対応するために商業資本家が「第1に市場生産に必要な資金その他を手工業者に前貸しするとともに、第2には手工業者の生産した商品の販路の開拓にあたったのであって、ここにいわゆる商業資本主義の成立を見る」(東洋経済新報社、1975年768ページ)。このような経営形態は「中世末期において、むしろ後に資本主義的発展に取り残された北イタリアやオランダの諸都市に広範に見られる」(同前111ページ)。実は、現在のイタリアにおいても注目されている経営形態のひとつに Flexible Specialization (柔軟な特化)というものがある。これは「人々の共同体や一群の企業群の自然科学的に、歴史的に決定され、限定された地域における活発な共存によって特徴づけられた社会、地理的な実体」(Becattini)と定義されている。イタリアにおいて Flexible Specialization が注目されるのは、大都市立地型の資本集約的大企業が不振に喘いでいるのとは対照的に、地方都市立地型の労働集約的中小企業が健闘しているからである。そして、多品種少量生産で不安定な市場に適応させている要因は「地域への帰属意識」であり「共同体意識」である。このようなイタリアの Flexible Specialization の議論と比べてみると、シータン村の三角枕の経営形態も類似するところがあるように思われる。

これまではシータン村の商人達を中心に検討してきたが、シータン村周辺の機織り地帯にも資本家的商人がいる。彼女らは自分の村や周辺の村でパーキットを織らせ、それをシータン村に売りに行くという前貸し問屋制的活動を行っている。同時に、三角枕より広く一般に用いられ、また作るのも簡単な四角枕については機織りから完成品までの全工程を組織し、自ら町へ売りに出かけている。このようなシータン村周辺で商人のいる村の名前を挙げると、シン村、ノンヒン村、ノンベット村などである。彼女達もシータン村の商人達と同様に自分の村の人たちが周辺の村に比べて不利にならないように配慮し



ながら仕事の配分を決めている。例えば、他の村では労賃が安いとしても自分の村の人々にも仕事を与えるということである。つまり、単純な経済合理性とは違う共同体的原理で行動しているように見える。ただし、これも市場の不確実性によるリスク回避の手段と考えれば経済合理的であるかもしれない。とは言うものの、たとえ自分の村の人たちから反感を持たれるようになっても仕事を続けることはでき、この場合には経済活動の場は県を越えて広範囲に及ぶことになる。

5. シータン村以外での三角枕作り

シータン村は三角枕作りの中心地ではあるが、シータン村以外では全く作られていないというわけではない。しかし、シータン村の三角枕があまりにも有名であり、また独占状態にあるので、そこに参入するために他の村ではより精巧なもの、より美しいものなど、特徴のあるものを作るという工夫をしている。以下ではふたつの例を挙げることにする。

パートン村とポーシー村は三角枕づくりに関してはシータン村と同じくらい歴史を持っている。これらの村ではパーキットの模様をより複雑で精巧なものにし、また中にはシータン村のように藁を詰めたりせず、100%、カボックの綿を使うなどより手の込んだものを作っている。その分、値段も高くなり需要量も少ないので注文生産を行っている。シータン村は低価格で大量消費向けであるのに対し、これらの村は高級品の少量生産であると言える。また、経営形態の発展段階論で言えば、問屋制家内工業以前の注文生産による手工業経営と言うことができよう。従って、シータン村のように企業家的役割を果たす商人もいない。商人の役割を果たすのは生産組合であり、政府の奨励・補助により活動している。また、生産規模が小さいので村落間の分業は成立していない。村間分業ではないが、隣のポーサイ村の人が生産組合に参加するという形で入ってくることはある。

もうひとつの興味深い例はカムブラ村である。カムブラ村はヤソトン県隣のアムナーチャルン県にあ

るが、地理的には近い位置にある。この村の特徴は天然染料を用いるところにある。天然染料の技術は村に古くからあったものや政府の援助により修得したものであるが、シータン村などが化学染料を用い、黄色や赤などの派手な色をしているのに対し、カムブラ村の製品は草木染めの地味な色をしている。化学染料に比べて手間がかかること、カボックが100%使われていることにより値段は高めであるが、外国人に人気があることもあり、最近バンコクのデパートでも見かけることが多くなった。この村も生産規模がまだまだ小さいために商人は出てきていないが、婦人組合が商人の役割を果たしている。この村は県の奨励により三角枕を作り始めたが、当初は県の役人しか買う人はいなかった。販路を開拓するうえでNGOの果たした役割は大きかった。NGOはこの村の人々に対して天然染料を用いることを勧め、また完成品をバンコク、ウボン、コンケンなどのデパート、みやげ物売り場で売れるように自ら販路を開拓していった。一旦、マーケット・チャンネルができると、後はひとりでに市場が開けていった。アムナーチャルン県は最近できた新しい県であるが、県庁や郡庁の職員にパーキットの服を着よう奨励したり、小規模農村開発資金を三角枕生産プロジェクトに供与しないしは低利融資してパーキット関連商品の奨励を行っている。関連商品にはパーキットを用いた鞆があり、カムブラ村内のひとつの地区で作られている。この地区はバンコクの特定の鞆工場への出稼ぎが多く、出稼ぎから帰ってきた人たちのうち男が鞆を作る作業をしている。工場は組合長の家の一部を使い、そこに男が数人集まって分業的に少量多品種の鞆作りをしている。これは経営形態の発展段階で言えば手工業工場経営(あるいはマニファクチャリング)と呼ばれるものに相当すると考えられる。

おわりに

最後に、シータン村を中心とする三角枕作りの産地が形成された歴史的背景について触れておきたい。ある村でのインタビューの話であるが、かつて枕作りが自給自足的に行われていた頃、親戚のいる村に遊びに行ったとき、枕をお土産として持って行ったところ非常に喜ばれ、それがきっかけとなって枕が売れることを知り、以後売り歩くようになった。また、下請け関係が周辺の村に広がっていく過程で述べたように、資本家的商人は周辺の村を回りながら

下請けを引き受けてくれる人を探していく。このような村を回りながら商売をするという慣習が、東北タイで産地が形成される基礎であると考えられる。このようなネットワークは歴史的な積み重ねが大きいほど有利であり、一般的に古い村ほど有利であると言える。実際、上述のシータン村、シン村、ポーシー村、ポーサイ村、クラン村は、マラリアによって消滅したティン村から派生した比較的古い村である。もっとも古いということは商人が発生することの必要条件でもなければ十分条件でもない。むしろ村に活動的な人があるか否かの方が重要であるとも言える。村が古いということは、そのような人が現れる確率が高いということを意味している。上述の村は幹線道路から離れていて交通の便は必ずしも良くないが、古くからの人的ネットワークを利用することによって商業活動を行うことが可能になっているものと考えられる。

〔参考文献〕

- Ikemoto, Y., "Income Distribution and Malnutrition in Thailand," *Chulalongkorn Journal of Economics* Vol.5 No.2 May 1993.
河野泰之・永田好克「タイ国東北部農村の生業構造に基づく村落類型:ヤソトン県を対象として」『東南アジア研究』30巻3号, 1992年12月。
高橋泰蔵・増田四郎編『体系経済学辞典(改訂新版)』東洋経済新報社, 1975年。

〔謝辞〕

本稿は2つの文部省科学研究費(国際学術研究)「コラート高原における人間・環境・作物複合の総観的研究」(課題番号050041096、代表者福井捷朗)および「地域発展の固有論理」(課題番号0641023、代表者末廣昭)による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。